

その11:孫娘の時代

老いた生命は、この世を去り、新しい生命が誕生する—それは人間とすべての生物が続けてきた永遠の営みですね。先月に私の父が他界しましたが、一昨年の12月には、長男に女の子が誕生しています。私にとって初孫で、「おじいちゃん」になったわけですね。すぐに妻とともに車を走らせ、神戸まで会いに行きましたよ。新しい命との出会い—うれしかったです。そして、私は「詩のごときもの」を、こっそり書きました。



ようこそ ようこそ この惑星に この地球の上に
そして この日本の国の 私たちのもとへ
時間と空間の座標の 見事に奇跡的な一致により
私はあなたと「出会い」をもつことができたのだ・・・

ここで全文を載せるには、少々長すぎる上、気恥ずかしい思いがするため、以下省略とさせていただきます。これからの世界、なにかんづく日本の社会は大変な時代になりそうだけど、どうか「いい人生」を送ってほしい、という内容ですね。今までは、「老い先短い」私の人生ゆえ、傍観者の立場で、日本の将来を眺めていたのです。しかし、自分の人生を生き始めたばかりの、小さな孫娘を見ていると、これからの世界が、他人事とは思えなくなってきましたね。



私は悲観的にものを考える傾向があり、これからの世界、とりわけ日本の社会について、明るい将来像を描くことが、どうしてもできないのです。世界各地の政情不安、金融不安、そして異常気象などの地球環境の問題も深刻です。そして、日本国内においては、いつ何処に襲ってくるかもしれない地震の不安、さらに深刻な雇用状況があります。最近報じられたデータによると、学校を卒業した若者の未就職者と、就職したものの早期に退職した者を合わせると、52%に達する、というのだから、異常事態というほかありません。

私たちのような戦後生まれの「団塊世代」は、やたらと人が多いですから、競争してゆくことが当たり前前の時代だったですね。そして、「人生の勝者」となるためには、俗な言い方をすれば、「一流大学を出て、いい会社に入る」ということであり、やりたい仕事と安定した職場を得るためにも、多

くの若者が、受験勉強に精を出したわけです。私のように、そのような「一流コース」から脱落する者も多かったのですが、それでも「それなりの仕事」を得ることができたし、頑張れば「中流」の生活をする事ができる、という時代だったと思うのです。

しかし、昨今の社会情勢をみると、そのような「一流神話」は過去のものになってしまった感じがすね。一流と言われる大学を出ても、就職ができなかったり、大企業に入社しても、倒産や大量リストラにあたり、派遣社員やフリーターとして生活している若者が、街にあふれている、という時代ですから。戦乱にまきこまれたり、大量の餓死者が出ている国よりはいいじゃないか、、という言い方もできますよ。確かに物は十分にあふれ、みんな飽食状態なのに、なぜか幸福ではなく、心に「不安」を抱いている、という奇妙な国なんですね。



そういう時代の、こういう国に、彼女は生まれ、これから自分の人生を歩んでいかなくてはならないわけです。現在、1歳と5か月、彼女は会うたびに成長しています。私のように、残された人生があまり長くない世代が、子供や孫たちに何ができるのか、それとも何もできないのか？ 一体、何を目標にして、何に価値を求めて生きるのか？ 簡単に答えの出ない、難しい問題ですね。

「そうは言っても、いっしょに暮らしとるわけじゃあないけえ、人見知りして、なかなか懐いてくれんのは、ちいと寂しいかのう」

(' 12・4・19)